

2009年1月16日

2008年度「緑の回廊」推進計画実施報告書

サブテーマ：植林による森林再生

ギニア国ボツウを主たる対象として、植林による森林再生事業をおこなってきた。「緑の回廊」と呼ぶ事業である。ボツウの群れと、東に位置するニンバ山の群れとは、幅約4kmもサバンナによって分断されている。そこで、そのサバンナに植林をすることで森林を連続させ、両群の交流をうながそうと考えた。1997年から始めているが、これまで2回野火が入った。緑の回廊を、当初は、長さ4kmで幅300m、すなわち120ヘクタールを設定して植林事業を開始した。まずサバンナの草を刈り取り、そこに5mおきに植林する。別途、チンパンジーの糞から取り出した苗木を毎年1万本用意して、それをサバンナに移植するという計画である。しかし、アセスメントをしてみると、ただ開墾して植樹するという当初の方法では、樹木の生存率が約25%だということが判明した。そこで新たな試みとして、ヘキサチューブと呼ぶポリプロピレン製の筒（直径約10cm、高さ1.4m）を日本から運んだ。3500本のヘキサチューブを設置して苗木の生長を見守っている。さらに2007年からの新たな試みとして、「挿し木」と「東屋」を始めた。とくに2008-09年当初の評価では東屋（ハンガー）方式の定着率の高さが際立った。これは、苗木を移植せず、サバンナで苗木を育てそのまま育成することで活着させる試みである。強烈な日差しをさえぎり、適度な湿度が保たれるように、屋根をヤシの葉でふいた東屋（5m*10m*2m）を建てて、そこで苗木を育成する。定着率のよさが際立っている。09年2月に、再度の調査をおこなう予定にしている。これがうまくいけば、リハビリテーション森林学でいうところの飛び石方式で、小さな森の塊を各所に作ることで森林再生を進める予定である。なお、イーピン、イーズルーと名づけられている河返林を「緑の回廊」の両端として新たに定め、その両端に防火帯としての幅10mのきり開きをもうけ、毎日それを巡回する要員を配置した。成長途上にある緑地帯を野火から守る作業である。すでにボツウの群れは頻繁に対岸のニンバ山を利用するようになった。一方、ニンバ山の群れの人なれも進めている。2008年には、初めてトラップカメラによるビデオ撮影にも成功した。直接観察による個体識別もすすみ、ニンバ山（セリンバラ、ギニア側）には、ガートイとトンボンボンと名づけた2群がボツウの近隣群として存在することがわかった。こうした植林作業には、植林という一義的な意義とともに、地元住民への環境教育という重要な側面がある。森は切るものではなくて、育てるものだという意識を植え付ける。そのために小学校を建て、毎年それらに支援を続け、パンフレットを作成しビデオでの巡回をして、環境教育に努めている。GRASP寄金の使途については別表にまとめた。文責：松沢哲郎

